

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10643

研究課題名(和文) 遺族ケアのニーズに対するフォレンジック看護の役割と看護記録システムの検討

研究課題名(英文) The Role of Forensic Nursing and Nursing Record Systems in Bereavement Care

研究代表者

山田 典子(YAMADA, Noriko)

横浜市立大学・医学部・教授

研究者番号：10320863

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：COVID19パンデミックと重なり計画通り進められない時期もあったが、研究チームの協力を得て代わりとなるデータ収集を行った。2年目より臨床心理士の齋藤和樹准教授をチームに加え、これまで遺族支援へ携わって来た心理職や精神科医から遺族支援の実態について情報を得た。これらの結果をもとに遺族支援の際に活用できるフォレンジック看護記録ツールを開発した。そのツールを用い、法医学者や異状死体に関わる刑事、看護学生らに記録に関する改善点等の意見をいただいた。これらをもとに遺族支援のケアに活用できる「みとり、みまもり、家族支援記録、アプリ MiMoKA みもか」を完成させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

疾病が原因となる死と比べ、死の特徴が異なる災害や事故で死別体験した遺族を対象としたケアに関する研究は少なく、看護記録もない。遺族の有病率や自殺率は高く、根拠に基づく看護を提供するために、遺族支援に活用できる「みとり、みまもり、家族支援記録、アプリ MiMoKA みもか」という、フォレンジック看護記録を開発した。この記録システムは、パスワード付きのタブレットで個人情報を守り、大規模災害や戦争等での大量の遺体情報を記録できる。一つの端末に3,000件保管できる。フォレンジック看護記録は、個人の特定に必要な情報を提供し、死亡診断書に反映できる。かつ、遺族への説明に活用しケア提供へ繋げられる。

研究成果の概要(英文)：In areas where the research period could not proceed as planned due to the COVID19 pandemic, we collected alternative data in collaboration with the research team. Based on these findings, we developed a forensic care record tool that can be used to support bereaved families. Using the developed tool, we asked forensic scientists, detectives involved in abnormal corpses, and nursing students to actually use the recording tool and get their opinions on areas for improvement.

Based on this information, we completed the "Mitori, Mimamori, Family Support Record, App" (commonly known as MiMoKA), which can be used to support bereaved families. Future challenges include incorporating location information in preparation for future large-scale disasters, improving the model to be compatible with different cell phones, raising awareness to encourage use of the app during normal times, and trying to obtain the next grant.

研究分野：災害看護

キーワード：Nursing Record App Disaster Forensic Nursing Digital Transformation bereaved families IC

様式 C - 19 , F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本邦における災害遺族支援は、2005年のJR福知山線脱線事故の教訓をもとに、DPAT (Disaster Psychiatric Assistance Team : 災害派遣精神医療チーム) や DMORT (Disaster Mortuary Operational Response Team : 災害死亡者家族支援チーム) による遺族対応や遺族へのグリーフケア、それらに関わる救援者のメンタルケアを行っている。

日本 DMORT は主に、人材育成のための研修会を開催し、急性期の遺族対応について「家族(遺族)支援マニュアル」を用い情報提供をしている。医療分野では、救護所、巡回診療、戸別訪問、病態の解明、急性期医療を担うチームの結成、職能団体による継続的な支援が展開され、急速に災害医療が発展している。一方、災害遺族支援は、急性期の介入に関する情報提供が主であり、継続的な観点からの支援について十分な知見が得られているとは言い難い。

近年、遺族支援の重要性が叫ばれ、日本 DMORT 研究会(2006年発足)、2017年に日本 DMORT が法人化し、地震や豪雨水害における家族(遺族)支援マニュアルの公開や情報提供等をしている。一方、DPAT は自然災害や航空機・列車事故、犯罪事件などの集団災害の発災から概ね48時間以内に精神科医、看護師、業務調整員が被災地域に入り、精神科医療および精神保健活動の支援を行っている。DPAT は、都道府県等からの派遣要請がなければ、どんなに精神科医らが必要性を感じても DPAT としての活動ができない。したがって被災地によっては早期支援に結びつかず、心的外傷が遷延化する遺族もいると推測される。

法医学者として災害支援にも携わっている九州大学の池田(2018)は、東日本大震災で検案後、子どもの棺の前から4日間動かない母親の事例を振りかえり、遺体安置所においてグリーフケアが提供されず、災害死の遺族に対する必要なケアが提供されていない、もしくは不十分であったと指摘している。遺族は喪失体験や喪失の脅威となる出来事に遭遇し、危機に陥った急性期の悲嘆反応で「身体的虚脱感」「罪悪感」「敵対的反応」「通常の行動がとれなくなる」「死んでしまいたい思いに駆られる」(Lindeman, E)ため、早期の適切な危機介入を要している。しかし、災害による遺族への支援は始まったばかりで、DPAT や DMORT で支援に携わる看護職は多くはなく、看護学において十分とはいえない。

2. 研究の目的

災害により遺族となった方々への支援の実態把握を行い、看護の専門性を活かした災害遺族への介入手段と看護記録システムの構築について検討することを目的とした。

3. 研究の方法

被災者遺族支援に関与させていただきながら、災害時フォレンジック看護記録を作成し、アセスメントした結果をもとに遺族介入に必要な情報の項目整理を行った。「いつ、どこで、誰が、どのように、どうなったか」を選択項目から選べ、タブレットに手書きでも記録できる。皮膚変色の色調を分析でき、経時的な変化を1名ずつのファイルにまとめる事ができる。デジタルカメラでは、記録をとった後、ケース毎にデータを入れ替えてまとめなくてはならないが、あらかじめ個人ごとのファイルになっているため、記録用紙枚数や遺留品等の写真が多くてもバラバラにならないという利点がある。複数の被災死者が発生した場合、有用である。

そこで、災害看護観察項目と遺族への看護ケアの記録ソフト作成のために、被災地への介入調査として、北海道胆振東部地震に関与した法医学者や看護職より情報を得て、試行版を作成した。

これをもとに、看護記録としての実用化に向けて、看護学生や訪問看護師から意見をもらい、遺体の災害看護観察項目と遺族への看護ケアの実際について書き込める記録ツールを完成させた。

4. 研究成果

【調査】

COVID-19 の拡大は、我々に大切な人の予期せぬ死と看取りの在り方を考えさせる機会となった。例えば、訪問看護における終末期ケアでは、利用者及び家族の望む治療や生活を把握し、療養者と介護者の揺れ動く気持ちに寄り添い、様々なサービスの調整が必要となる。

東京都監察医務院(2018)の報告では、自宅住居で亡くなった単身世帯の者は5,554名であり、うち65歳以上は男性が2,534名、女性は1,379名であった。第一発見者に保健師や訪問看護師がなる場合も少なくないと思われ、警察通報の傍ら、発見時の情報、治療経過・内服薬および主治医情報等の収集及び記録を正確かつ効率的に行うことが求められる。これまで高齢者の虐待症例等を想定し、体表観察の画像をデジタル解析し記録するタブレット用のアプリケーションの開発を行ってきたものをベースに、その体表観察のモジュールに加えて孤立死の症例の現場での記録を行うための諸機能を組み入れたアプリケーションの開発を行った。

最初に、死亡診断書や死体検案に必要な情報、及び実際に死体検案などに従事している協力者（医師、歯科医師、警察官）より得た意見等をもとに、アプリケーションに新たに組み込むべき項目や機能等を検討した。また、協力施設の協力者の意見を基に、使用者が使いやすいような機能を追加した。所属機関の研究倫理委員会の承認を得た後、病院や施設等の倫理審査を受けた。

結果、開発したアプリケーションに追加した機能は以下のとおりとなった。

- (1)基本情報：住所、実施場所、死亡診断等した医師の氏名、医師に報告をした看護職の氏名、説明を受けた家族の氏名と続柄。
- (2)御遺体の情報：遺体の発見時の状況、遺品、身の回りの状況を撮る写真とビデオ機能、体表観察記録、口腔内の記録等。
- (3)フリーメモ。
- (4)入力したデータを暗号化した上で Excel ファイルに 3000 件までエクスポートできる。
- (5)帳票出力機能。

実用化に向けては、現場の実務者と今後検討をしていく予定である。熱中症や水害による居住地を特定できない場所での死亡に対しても対処できるよう、改良を加える。本アプリケーションは、ICT を用いた遠隔からの医師の死亡診断に携わる可能性がある看護師や、身近に迫る不慮の死に対応できる可能性がある。

【調査 2】

時の経過とともに消失する現場の状況や被災者の持ち物について記録するアプリの実用化に向けてアプリの使いやすさの実証と、災害時の遺族支援に目を向ける教材活用の仕方を検討。

2021 年 9 月から 2023 年 2 月までに、A 大学 3 年生の選択科目においてフォレンジック看護記録アプリ（以下、アプリ）を使用し記録した内容の項目毎の件数を計上した。

アプリへの記録の履歴については、学生の自由意思に任せ消去しても構わないことを説明し、アプリの使用に関するアンケートを配布し、無記名で回収した。DX を活用した教材の検討でもあり、研究倫理委員会から非該当と判断されたが、倫理的配慮として記載対象となった個人や場所などが特定されないように配慮した。

結果、86 名の受講生のうち、任意で記録を残した 31 件を分析対象とした。対象の氏名、性別、生年月日、発見場所、発見時の状況、遺留品や身の回りの状況に関しては全員記載していた。

現場の写真は 18 名が撮影しており、撮影枚数は、1 枚 14 名、2 枚 2 名、4 枚以上が 2 名だった。写真撮影時にスケール（ものさしなど観察対象の大きさがわかるようなもの）を挿入していたものは 13 件であった。

実施施設名、実施施設住所、報告者の看護師、説明を受けた家族、死亡の報告を受けた時刻に関しては 17 名が記述していた。

見た目の観察として外表検査を行い、ボディマップを記載したものは 15 名であった。その他、自由に記述できるメモを活用しメッセージや記録項目にないメモ等を書き残したものは 4 名であった。

アプリを用いた記録に対し、「情報が一目でわかり把握できる」18 名、「短時間で楽に記録できる」16 名、「記録への写真の添付が簡単だった」16 名、「アプリを初めて使ったがとても簡単に使えた」14 名、「記録が分かりやすく短時間で入力できた」13 名、「支援を必要とする人の状況を把握しやすい」7 名の肯定的な意見が多かった。他方、「アンドロイドの機種になじみがなく扱いづらかった」15 名、「使いこなすまでに時間がかかる」8 名という意見もあった（図 1、図 2）。

自由記述では、「アプリによる観察項目の書き込みは、情報をわかりやすくまとめることができ便利だと感じた」「初めて行うタイプの授業だったため最初は混乱したが、慣れたら記録が行いやすく楽しかった」「もう少しゆっくり学びたいと思った」等の記載があった。

研究の限界と今後の課題として、DX、ICT を用いた災害遺族の支援につながる試みを行い、教材の提示の仕方、状況の設定、机間巡視のサポート等、今後の課題が明確になった。アプリの使用は、災害の陰にある「その人としての存在」に光をあて、記録を基に多職種協働のきっかけをつくり、時には仲立ちをして人の痛み介入していく看護の本質に気付く教材であった。授業展開を工夫改善することで、災害時に遺族の QOL の向上に必要な関わりを考え、予期せぬ死に直面した遺族へ急性期の寄り添いのケアと、中長期的な回復支援へ繋ぐことができる手ごたえを得た。

図1 通常の看護記録に虐待に関する内容を記録する際に感じていることについて

正解 0/33 件

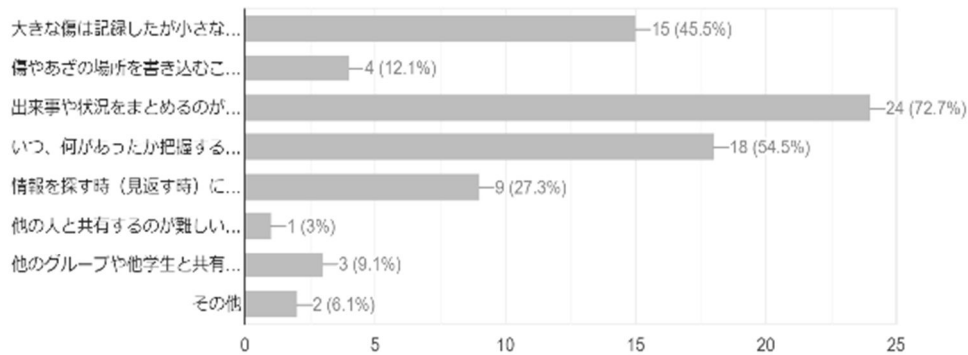
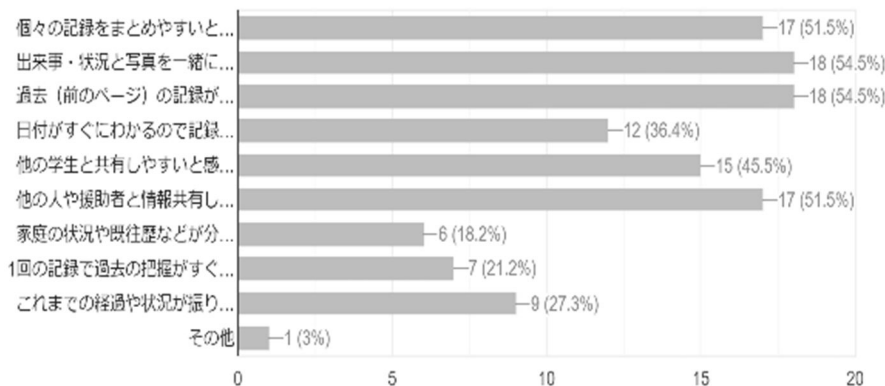


図2 タブレット(アプリ)を用いた看護記録に対する感想および意見

正解 0/33 件



【調査3】

地震・台風等の自然災害が多発する日本で、災害は大切な人の命や大事な財産を奪い、私たちは対象喪失や悲嘆を体験する。近年、災害時にいわゆる「こころのケア」を行うことは、救護や支援活動の選択肢の一つではなく、必須のものになっている。

2011年3月11日の東日本大震災では、地震のみならず津波と原子力発電所の事故による未曾有の被害が広域に発生し、多くの方が亡くなり、2500名以上の方が行方不明となっている。そこで、災害時のこころのケアがどのように行われているのか、その現状を把握する調査を行った。

災害時の心のケアに関する研修会を開催し、その参加者にアンケートを依頼した。研修内容は、「個人による災害時のこころのケアの実際」、「組織による災害時のこころのケアの実際」、「DMORT(災害死亡者家族支援チーム)による遺族ケアの実際についてであった。

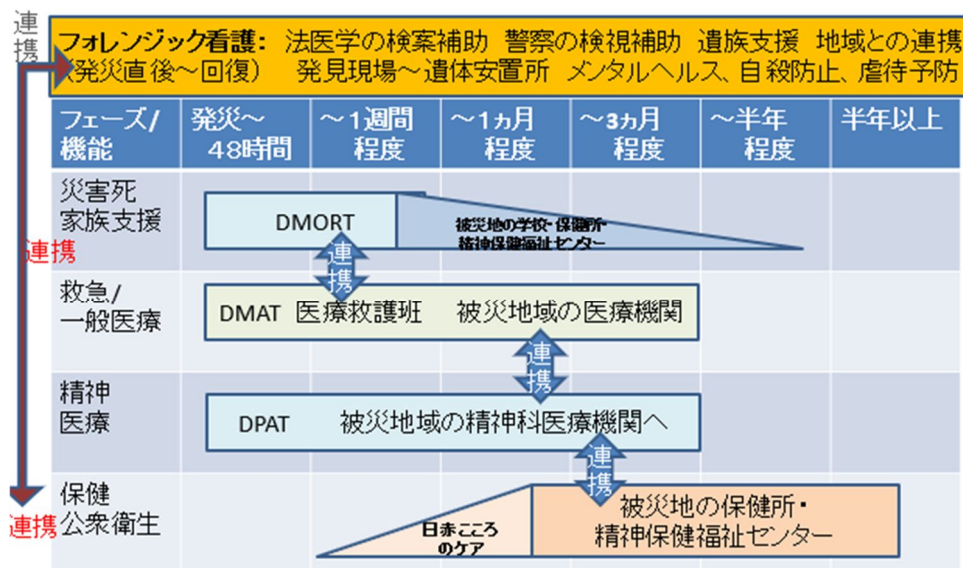
アンケートは、参加者の属性(職種、経験年数)、遺族支援の経験の有無、経験した人の支援内容とそこで感じた課題等について、A4用紙片面1枚で実施した。アンケートの意図を研修開催者より説明し、調査への協力は提出をもって了解を得るものとした。

結果は、参加者32人中、回収14人(回収率44%)。回答者の職種は、心理職6、教員5、看護学生3、保健師2、看護師1であった(重複あり)。災害支援経験者は7人であった。うち被災者支援7、支援者支援4(重複あり)であった。研修の参加動機は、災害支援への関心10名、遺族ケアへの関心6名、そのほか1名で、遺族ケアの経験者は1人だった。また、遺族ケアの記録をした人はいなかった。

近未来に南海トラフ地震や首都直下地震などが予測されており、これらの災害が起きれば多くの死者が出ると予想されている。遺族ケアに対する関心やニーズがあると思われるが、その実際を書き記した記録はなく、ケアの実態の詳細については今後の課題として残った。災害直後から遺族支援を行うことを目的として2017年に一般社団法人「日本DMORT」

が設立された。研修会を開催することで「災害死亡者家族支援チーム」への興味関心が湧き、遺族への支援に関する実践教育につなげていけるよう取り組む必要がある。その際にフォレンジックな看護記録の活用のもと根拠に基づいたケアの実践が望まれる。

図3 フォレンジック看護記録を用いた災害遺族への継続性のある支援イメージ



研究概要図:フォレンジック看護の活動時期と主な連携体制

【アプリの内容紹介】

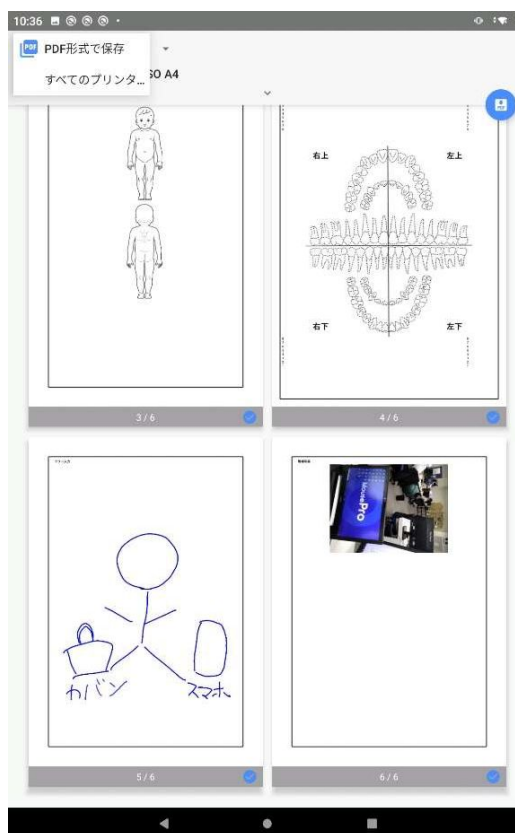
精神看護学ホームページ www-user.yokohama-cu.ac.jp/~ycu_pn/wp/
被災されたご遺族を支える 看護職版.pdf (yokohama-cu.ac.jp)

* フォレンジック看護記録アプリより一部抜粋

【項目に沿って記入する】



【ボディマップ、歯のチャートの活用】



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 山田典子、西岡徹、兵頭秀樹、的場光太郎、神繁樹、齋藤和樹	4. 巻 4
2. 論文標題 日本市民安全学会で芽生えた異分野の交流と新たなサービス共創 「法医 (Forensic) 看護とNコード」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本市民安全学会機関誌	6. 最初と最後の頁 38-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子、兵頭秀樹、的場光太郎、...齋藤和樹	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 計量テキスト分析を用いた法看護教育の課題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本セーフティプロモーション学会誌	6. 最初と最後の頁 18-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 2023(2)
2. 論文標題 遺族介護ニーズに対する法医学看護の役割と看護記録制度の検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 サイエンスインパクト	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.21820/23987073.2023.2.22	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 22(3)
2. 論文標題 災害による死と遺族へのケア～感染症に関連する死に焦点をあてて～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本災害看護学会学会誌	6. 最初と最後の頁 75-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 1(1)
2. 論文標題 新型コロナ感染症禍と看護学～メンタルヘルスに焦点をあてて～	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本市民安全学会機関誌	6. 最初と最後の頁 51-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤和樹	4. 巻 22(1)
2. 論文標題 災害時の「こころのケア」について 私の経験から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 外来精神医療,	6. 最初と最後の頁 62-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 11
2. 論文標題 大規模災害時の死体検案に関する支援とフォレンジック看護	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Best Nurse	6. 最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子, 兵頭秀樹, 松橋朋子, 及川真一	4. 巻 7
2. 論文標題 カラーチャートを用いた高齢者の体表観察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本フォレンジック看護学会誌,	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 YAMADA Noriko, SUZUKI Misato, TANAKA Rie	4. 巻 6
2. 論文標題 Construction of Syllabi for Forensic Nursing Education in Japan 日本のフォレンジック看護教育におけるシラバスの検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本フォレンジック看護学会誌,	6. 最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 12
2. 論文標題 フォレンジック看護実践 (前編) 「高齢者体表観察記録スケール」ならびに「高齢者の体表皮膚色調の変化についてのカラーチャート・スケール」を用いた観察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Best Nurse	6. 最初と最後の頁 29-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子、船山健二	4. 巻 13
2. 論文標題 「フォレンジック看護学会」の活動紹介	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本セーフティプロモーション学会誌	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山田典子	4. 巻 2
2. 論文標題 フォレンジック看護実践 (後編) 「高齢者体表観察記録スケール」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Best Nurse	6. 最初と最後の頁 37-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Yamada, Hideki Hyodoh , Tomoko Matsuhashi & Shinichi Oikawa	4. 巻 13(5)
2. 論文標題 COVID-19 Early Detection Tool for Elder Abuse during Epidemics, Digital Analysis of Color Tone on the Surface of the Skin in Elderly	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Global Journal of Health Science	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Yamada Noriko, Tanaka Rie, Yanai Keiko
2. 発表標題 Psychological interventions for supporting bereaved families during large-scale natural disasters:Expectations for disaster support nurse activities in Japan.
3. 学会等名 International Society of Caring and Peace 2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山田典子、田仲里江
2. 発表標題 DX, ICT遺留品記録アプリを活用した災害看護教育の教材検討.
3. 学会等名 日本災害看護学会第25回年次大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山田典子、高山新吾、松橋朋子、田仲里江
2. 発表標題 タブレットを用いた孤独死対応の記録用アプリケーションの開発
3. 学会等名 日本フォレンジック看護学会第9回学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 齋藤和樹、吉村 仁、村上典子
2. 発表標題 災害時のこころのケア～遺族ケアを中心にして～
3. 学会等名 第38回日本精神衛生学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yamada.Noriko, Yanai Keiko
2. 発表標題 Characteristics of Forensic Nursing Education in Japan: a Quantitative Text Analysis
3. 学会等名 the 2022 International Conference on Forensic Nursing Science and Practice (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山田典子, 秋元静香
2. 発表標題 訪問看護ステーションを視野に入れた災害看護研修の検討
3. 学会等名 第22回日本赤十字看護学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤和樹, 吉村仁, 中田貴晃
2. 発表標題 心理職による被災地支援の方法についての探索的研究 面接調査の結果から
3. 学会等名 日本精神衛生学会第37回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 齋藤和樹, 池田美樹, 荒川ゆかり, 吉村仁
2. 発表標題 心理臨床家は被災地で何ができるのか (2) 被災地にどのように入り、どのような活動を するのか、しないのか
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田典子、兵頭秀樹、的場光太郎
2. 発表標題 予期せぬ死に直面した遺族への対応 ~新型コロナウイルス感染による遺族に焦点をあてて~
3. 学会等名 第22回日本災害看護学会誌、22(1), pp102.
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Noriko Yamada
2. 発表標題 Actual condition and prospect of elderly people by body surface inspection tool.
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田典子、兵頭秀樹
2. 発表標題 カラーチャート・スケールを用いた高齢者の体表色調のデジタル解析
3. 学会等名 第7回日本フォレンジック看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田典子、坂東利枝、鈴木真人、荻原麻紀、佐藤美恵子
2. 発表標題 混合研究法の文献検討より得たクリティークへの示唆
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山田典子、加藤智哉、田辺有理子、的場光太郎、兵頭秀樹、齋藤和樹	4. 発行年 2024年
2. 出版社 プリントバック	5. 総ページ数 24
3. 書名 行政支援・訪問看護な立場から家族にできること	

1. 著者名 山田典子、兵頭秀樹、的場光太郎、齋藤和樹	4. 発行年 2024年
2. 出版社 プリントバック	5. 総ページ数 24
3. 書名 被災されたご遺族を支える	

1. 著者名 齋藤和樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字国際人道研究センター	5. 総ページ数 28
3. 書名 日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字国際人道研究センターサイコロジカル・ファーストエイド（PFA）ガイド要約版	

1. 著者名 ローズ・E・コンスタンティノ, パトリシア・A・クレイン他 柳井圭子監訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村書店	5. 総ページ数 618
3. 書名 フォレンジック看護ハンドブック. 法と医療の領域で協働する看護実践. 第5章と第20章災害時のフォレンジック看護分担	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>MiMoKA-遺族・家族へのあたたかなケアの提供- https://www.rcakita.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2022/06/index.html</p> <p>被災されたご遺族を支える 看護職版.pdf (yokohama-cu.ac.jp) 精神看護学ホームページ www-user.yokohama-cu.ac.jp/~yucn/wp/</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	兵頭 秀樹 (Hyodoh Hideki) (30306154)	福井大学・学術研究院医学系部門・教授 (10101)	
研究分担者	的場 光太郎 (Matoba Kotaro) (00466450)	北海道大学・医学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	斎藤 和樹 (Saitou Kazuki) (50289766)	日本赤十字秋田看護大学・看護学部看護学科・准教授 (31403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------